

漢詩神奈川

第 30 号

神奈川県漢詩連盟
事務局

神奈川県海老名市
浜田町16-9

TEL-FAX
046-233-7641

発行人 三村公二
編集人 高津有二

課題は若返りと斬新な発想!

神奈川県漢詩連盟会長 三村公二

今年度も三年続けてのコロナ禍の下でのスタートとなった。そういう中にも、昨年度の初心者入門講座には多くの方が応募してこられて新しい仲間が増えた事は非常に喜ばしい出来事であった。しかし、その一方では、亡くなられた方が多く、古くからの仲間を失う事になった残念な一年でもあった。

今年度の理事会は昨年同様、対面では実施できなかったが、総会は対面で迎える事ができた。なかでも、新しい役員が増えた事は神



三村公二会長

漢連にとつては大きな意味があるであろう。ある名門ゴルフ場で「スロープレイで一番困るのは、昔はシングルク

ラスだったが、年を取って腕が落ちてきているにまったく気づこうとしない人である」と聞いた事が有る。若いという事は心の持ち方であつて年齢の事ではないという有名な言葉も有るには有るが、どの世界でも同じで、特に連盟事務局の若返り、世代交代は、漢詩界が新しい局面を迎えようとしている今こそ、更なる発展を考えるうえでは欠かせない重要事項であると思つている。

佩文韻府、詩語集、大漢和辞典等で代表されるこれまでの七つ道具に代わつて、ネット上の「搜韻」の活用が常態化してきている。パソコン・スマホの活用という単なるツールの変化だといつてしまえばそれまでだが、どうもそれだけではなさそうである。神漢連だけではなく、日本の漢詩界は、今、大きな曲がり角に来ていると感じている。こういう時こそ、若い人達の斬新な発想が必要不可欠であ

ろう。

総会の後で実施された市川桃子先生の講演会には連盟以外にも多数の方々が参加された。初心者入門講座には今年も多数の受講希望者があつた。これらの現象を見てみると、漢詩は決して絶滅危惧種ではないと思う。神奈川だけの特殊事情とは思われないので、全日本漢詩連盟レベルで漢詩愛好者の一層の掘り起こしの努力が望まれる所である。

連盟の今年の課題は前記の漢詩作における新しい流れを着実に受け止めていく事と、これと連動させて漢詩界全体の底上げを図っていく事である。スマホで漢詩をキャッチフレーズにして始めた神辞会グループの活動が全国の他連盟からも注目され、七絶推敲表を活用したいので協力願いたいという要望が事務局に届いているが、これがその一つの切り口になればよいのになあと期待を膨らませていく。

神辞会の皆さん、及び、新役員の皆さん方の今後の活躍を見守っていききたい。



会長の話聞き入る出席者

連盟の行事

令和四年度第十七回定期総会

―対面式で開催―

事務局長 高津有二

本年度の第十七回定期総会は五月二十日、神奈川近代文学館ホールにおいて、市川桃子先生のご臨席を賜り、会員約五十名が出席して開催された。

総会では、三村会長から昨年の創立十五周年事業への御礼と「搜韻」のネット検索に代表される漢詩界の新しい流れに、神漢連一丸となって取り組んでいく決意が述べられた。次いで、活動報告、今後の活動計画と決算報告、予算計画(本頁中段参照)並びに人事案(本頁下段参照)が提案され、承認された。

決算面では十五周年事業に対する会員各位からの多大のご寄付に対して感謝を申し上げたい。また、人事面では六名の新執行理事の今後の活躍を大いに期待したい。

総会後の講演会では市川桃子先生の「美について」の講演があり、会員以外の参加者を含めて百十余名の聴講者があった。講演内容は、YouTubeに収めて、全国各県連にも送付して、好評を博している。

令和3年度一般会計決算			15周年記念事決算(令和3)			令和4年度一般会計予算			令和3年度田原基金決算		
区分	費目	金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額
収入	前年度繰越	295,254	収入	一般会計から	0	収入	前年度繰越	584,590	収入	前年度繰越	864,033
	年会費等	781,500		協賛金	817,500		年会費	735,000		七絶頒布等	474,170
	行事参加費	115,060		懇親会参加費	0		行事費	647,000	支出	七絶編集他	479,677
	その他	3,380		記念品頒布等	430,300		その他	31,000		残	次年度繰越
	収入計	1,195,194		収入計	1,247,800		収入計	1,997,590			
支出	庶務費	222,400	支出	案内・記念式典	158,740	支出	庶務費	660,000	令和4年度田原基金予算		
	広報事業費	54,453		会報29号	56,080		広報事業費	140,000	区分	費目	金額
	教育事業費	194,658		漢詩フェスティバル	111,306		教育事業費	480,000	収入	前年度繰越	858,526
	全漢連費	299,870		神奈川清韻刊行	190,062		全漢連費	262,500		七絶頒布等	46,000
	その他	41,236		記念グッズ製作	529,599		その他	155,090	支出	叢書刊行	20,000
	支出計	812,617		支出計	1,045,787		支出計	1,697,590		その他雑費	25,000
残	次年度繰越	382,577	残	残高	202,013	残	次年度繰越	300,000	残	次年度繰越	859,526

令和四年度人事

☆理事

玉井幸久 古田光子 岡田泰男
横山真吾 桜庭慎吾 室橋幸子

☆執行理事

三村公二(会長) 水城まゆみ(副会長)
中島龍一(副会長) 飯島敏雄(副会長)
高津有二(事務局長) 香取和之(事務局次長)
瀧川智志 新井治仁 山口幸雄
薦清昭 久川憲四郎(新) 柴本信子(新)
白石信隆(新) 五嶋美代子(新)
高橋純子(新) 東島正樹(新)

☆監事

松井秀人 鈴木正敏

☆特別相談役

岡崎満義

☆相談役

住田笛雄

☆顧問

石川忠久 窪寺啓
浅岡清明 池上一利

☆運営委員

家吉幸二 岩波弘道 高田宗治
竹村文孝 川喜田康 田川行雄
橋本孝一 中村講二 安藤啓子(新)

(参考)

☆特別会員

市川桃子 高芝麻子
後藤淳一 菅原武

☆竹林舎

玉井幸久 飯沼一之 古田光子
住田笛雄 桜庭慎吾

寄贈本頒布会―多くの会員が殺到

五月二十日の定期総会が開かれる前の午前中、故城田六郎氏の寄贈本約三〇〇冊と漢詩愛好会詩集約一〇〇冊の頒布会が開催された。この催しは今回で四回目となるが、我々の大先輩である城田先生の蔵書(漢詩集、辞書・韻書類、及び漢詩のバックグラウンドとなる歴史・紀行文など)を超廉価で会員の方々にお分けすることによって、漢詩鑑賞や漢詩創作に役立てて頂きたいがための趣旨によるものである。

今回は早めに蔵書目録を発表した為か開始時間が十時にも拘らず、その前から列をなして並び、開始と同時になだれ込むように目的の本を求めて取り囲むありさまだった。また、辞典類や漢詩集が特に多いため、多くの参加者が集中した場合のことを考え、周到な準備をしていたが、何事もなくスムーズに進行了した。午前中には約四〇〇冊の大半が売切れしたが、残った本の殆んどは漢詩愛好会の詩集類と英独辞書類だった。(高田宗治)

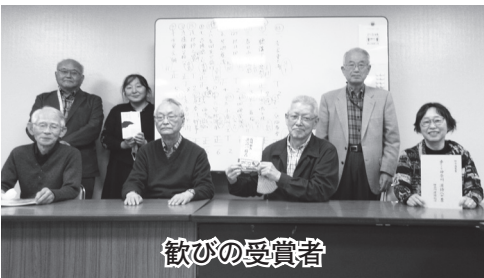


研修会

十期以降の新世代が大活躍

本年度の研修会は、三年ぶりに四月二十一日、神奈川近代文学館にて十九首の投稿で開催されました。コロナ感染症下、一グループでの開催となりましたが、オプザーバーを含め十八名で、ベテラン、若手と、サークル横断的な顔ぶれとなりました。作者を伏せて全投稿詩を事前に配布、自由に参加者の解釈、疑問点をぶつけ合うという討議方式は従来と同じで、題材も大河ドラマのテーマを始め、紀行詩、日常詩など多彩な詩評の交換を楽しむことができました。

印象的だったのは、伝統的な漢詩の語法、用例にできるだけ忠実に沿いながら、絶句を物語として構成すべきとの意見と、作者の心象を反映した詩語の並びを大切にして、書き下しの工夫でワイドな表現を目指しても良いのでは、との両論が出されたことで、日頃そのほごまで詩作する参加者が多いと感じた次第です。その後、恒例の選句投票結果が発表され、次の通り表彰、賞品授与されました。(新井治仁)



優秀賞

志詩会 木村 孝

聽講演曹操悲哀

講演曹操の悲哀を聴く

瞻望天海港丘陁

天と海を瞻望す 港丘の陁

萬朶瓊葩風遍馨

万朶の瓊葩 風遍く馨し

佳日重陽文學館

佳日重陽の文学館

英雄朗詠夢中聽

英雄の朗詠 夢中に聴く

優良賞

十期会 細江利昭

雨水訪山上梅園

雨水 山上の梅園を訪う

馥郁梅花春氣柔

馥郁たる梅花 春氣 柔らかなり

清香飄動掩山邱

清香 飄動して 山邱を掩う

遠望滄海連蒼昊

滄海を遠望すれば 蒼昊に連なる

好弄東風盡日遊

好し東風を弄して 尽日遊ばん

佳作賞

金星干支会 五嶋美代子

鳴子峽霜楓

鳴子峽霜楓

清幽山氣上河梁

清幽なる山氣は 河梁を上り

眼下深溪仰碧蒼

眼下の深溪は 碧蒼を仰ぐ

青女來臨秋十里

青女 來臨して 秋十里

須教萬樹競紅粧

須らく万樹をして 紅粧を競わしむ

詩林会 白石信隆

春汀即事

春汀即事

風軟沙汀淑氣盈

風軟らかにして 沙汀淑氣盈ち

趁魚白鷺羽翎輕

魚を趁う 白鷺羽翎輕し

鷓鴣潛水忽鈔餌

鷓鴣潛水して 忽として 餌を鈔れば

看客中心僅不平

看客の中心僅かに 平らかならず

特別賞

逸語会 松田奈月

芳酒塵洗

芳酒塵洗ふ

夜來風雨落黃梅

夜來の風雨 黃梅落つ

朝拾清香釀酒材

朝に清香を拾いて 酒材に醸す

避密一年猶愛醉

密を避け一年 猶酔うを愛し

隔牆呼友盡餘杯

牆を隔てて 友を呼び 餘杯を尽さしめん

漢詩に現れる情景 『美』について ―市川桃子先生講演会―

令和四年五月二十日神奈川近代文学館に於いて、明海大学名誉教授の市川桃子先生の講演会が開催されました。会場は百二十名に近い来場者でコロナ禍の中、大勢の聴講者で盛会でした。講演後には会場からの質疑もあり応答もいただきました。

漢詩に現れる美について、詩経の時代から六朝時代までの「詩による美に対する感じ方の変遷」のお話は、新鮮で楽しい時間でした。以下は先生の講演の内容です。

詩経の時代

『説文解字』の「美」の項目には、美とは甘である。美という字は羊と大からなる。とあり、その大きな羊は天が受け入れてくれる美しいもので、「美」は天と結びついていました。

『詩経』(BC1200-500)
周頌「我將篇」冒頭(祭礼の歌)

我將我享

維羊維牛

維天其右之

【訳】我らはささげ
たてまつる。



市川桃子先生

この羊を この牛を、
天よ これを尊重したまえ。

また、『詩経』から周南 桃夭篇の「桃」、陳 風 澤陂の「蒲」と「蓮」、鄭風 野有蔓草の「つる草」の描写は「興」と呼ばれ、結婚、求愛、長寿を祈る歌によく現れます。三千年前は今よりずっと天(造物主)と近かったため、美しい景色、立派なものを見たときに「綺麗だなあ」と、対象として鑑賞するのではなく、そこに天の力を見て、常に畏敬の念をおぼえ、その力に預かりたいと思っていたのではないのでしょうか。

戦国の時代

『楚辞』(BC400-221)九歌・山鬼(冒頭)では、山の妖精が、下界に薜荔(ねなしかずら)や女蘿(さるおがせ)を身に着けている美しい男性を見つけます。根が無く、木や草の茎にからまって生きている薜荔や女蘿を身に着けている人は、きっと将来一緒になれる人を求めているはず、仲良くなれるかもしれないと、妖精は沢山の香草(辛夷、石蘭、杜衡、芳馨は多くの香り草)を身に着け空から下りてきます。楚辞の中で香草を身に着けることは自分が薫り高い高貴であることを示し、更に自分に力を与える意味もありました。

魏の時代

次は、三国志の英雄魏の曹操の子供たちの

詩、曹植(192-232)の公讌詩です。曹植はこの時代でもっとも傑出した詩人と言われ、彼のもとには大勢の文人が集まっていました。中でも「建安の七子」と呼ばれる孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・应瑒・劉楨の七人の詩人でした。その作風を建安体といいます。この詩は、曹丕と曹植、そしてその友人が、宴会後に車を飛ばして夜の池に遊びに出かけた時の詩です。十二句の詩ですが、中六句の情景描写の部分を紹介します。

明月澄清景	明月 清景澄み
列宿正參差	列宿 正に参差たり
秋蘭被長坂	秋蘭 長坂を被い
朱華冒綠池	朱華 綠池を冒う
潜魚躍清波	潜魚 清波に躍り
好鳥鳴高枝	好鳥 高枝に鳴く

明月のさやかな光、夜空に輝く星座。香り高い蘭草に、赤い蓮。魚や美しい鳥たち。見たままではなくそこから吉瑞を選び出し詩を詠んでいます。また、中国語で読むと弾むようなりズムが感じられ、若者らしい作品となっています。

東晋の時代

時代がさらに下り、陶淵明(365?-427)の飲酒十二首 其五です。人の一生とは、この世とはいったい何だろうかということを考えさせる哲学的で素晴らしい詩です。今日、注目し

たいのは菊と南山の景色です。

結廬在人境 廬を結んで人境に在り
 而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し
 問君何能爾 君に問う何ぞ能く爾るやと
 心遠地自偏 心遠ければ地自ら偏なり
 採菊東籬下 菊を採る東籬の下
 悠然見南山 悠然として南山を見る
 山氣日夕佳 山氣日夕に佳し
 飛鳥相與還 飛鳥相いと与に還る
 此中有真意 此の中に真意有り
 欲辯已忘言 弁せんと欲すれば已に言を忘る

菊については、花を愛でているのではなく、寿命を延ばす薬効のある菊酒を飲んで、その力に預かるうとしているのです。また、この夕景を美しいと鑑賞するだけでなく、「この景色の中に真意がある」と考えるのです。陶淵明は、植物を、景色を、自分にとって、あるいは人にとって、密接にかかわる存在として捉えていました。

六朝の時代

今日の中心となる六朝・宋の謝靈運(433-499)の詩、石壁精舍還湖中作です。石壁の精舎から船で湖を通り、家へ帰った時に詠んだ詩。永嘉の太守を辞めて始寧に帰った後の作で、夕陽が次第に光をおさめていく景色が美しく描かれています。

昏旦變氣候 昏旦に氣候変じ
 山水含清暉 山水は清暉を含む
 清暉能娛人 清暉能く人を娛しませ
 游子憺忘歸 游子憺として帰るを忘る
 出谷日尚早 谷を出ずるに日は尚お早く
 入舟陽已微 舟に入れば陽は已に微かなり
 林壑斂暝色 林壑 暝色を斂め
 雲霞收夕霏 雲霞 夕霏を收む
 芰荷迭映蔚 芰荷 送いに映蔚し
 蒲稗相因依 蒲稗 相いと因依す
 披拂趨南逕 披拂して南逕に趨り
 愉悅偃東扉 愉悅して東扉に偃す
 慮澹物自輕 慮澹かにして物自ずから軽く
 意愜理無違 意愜いて理違う無し
 寄言攝生客 言を寄す 攝生の客に
 試用此道推 試みに此の道をもつて推せと

ここには、天(造物主)への畏れや、人にとってどのような意味や力を持つかというようなこととは関係なく、景色を対象としてありのままに楽しむ様子が見られます。

人は長い間、自然(空、山、木々、草花、動物など)を人と関わりあるものとして捉えていました。謝靈運が山水詩を書いたところから、自然を客体として人とはかわりのない独立したものとして見るようになります。天の呪力からも、人への執着からも解放されて、このころから詩人たちは客観的に「美」を楽しむようになりました。

美の洗練

謝靈運がいた六朝時代は貴族社会でした。謝朓の詩、玉階怨では哲学や人生への思いなどは書かれておらず、ひたすら美しい。財力に裏打ちされた貴族文化の中で、教養が磨かれた六朝時代があったからこそ「美」は洗練されていき、次の唐詩(例えば王維など)に引き継がれていったのです。

「皆様は何を美しいと思われませんか。」という、市川桃子先生の問いかけから始まった、漢詩に現れる情景の「美」の探検はいかがでしたか。この度の講演会では沢山の詩を取り上げて下さったのですが紙面の都合上すべてを紹介できず心苦しいばかりです。こちらの市川桃子先生の講演はYouTubeで観ることが出来ます。是非ご覧ください。

(記 高橋純子)



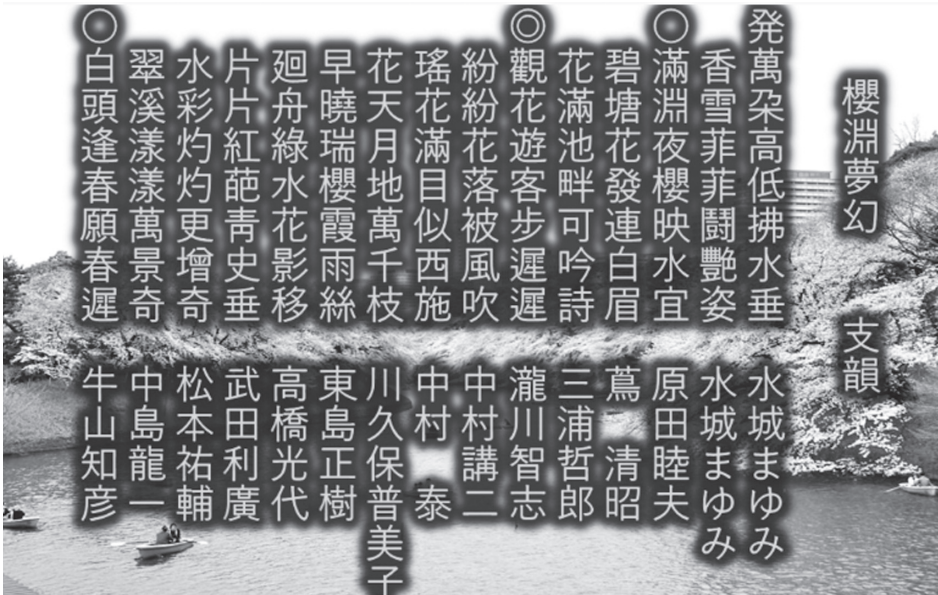
熱心に聞き入る聴衆

オンライン吟行会

満開の桜の千鳥ヶ淵にて(三月二十八日)

オンライン吟行会は、昨年の十五周年記念行事の一環として、初めて行われました。参加者は二十八名、二組での実施となりました。投句結果は次のとおりです。

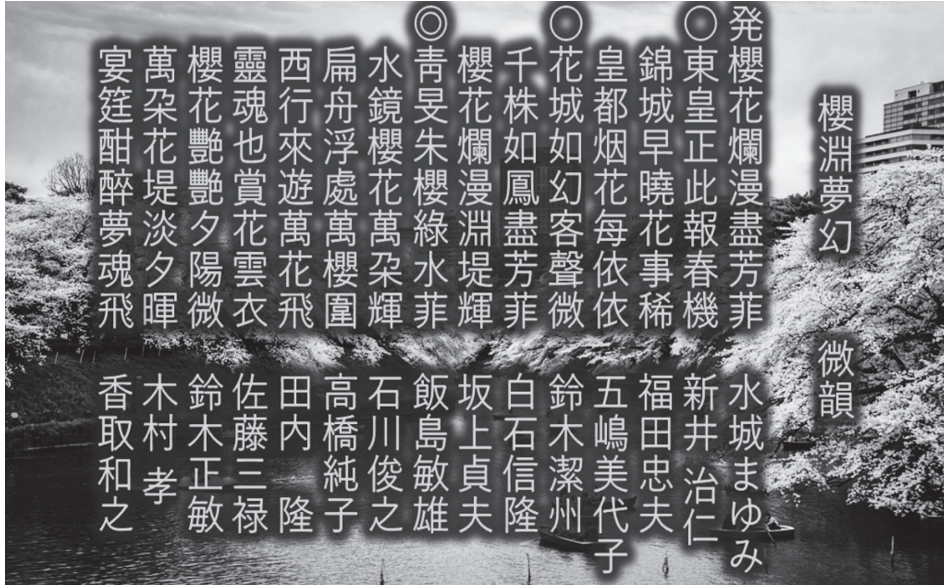
◎が優句 各一名、○が秀句 各二名です。



櫻淵夢幻 支韻

○ 発萬朶高低拂水垂	水城まゆみ
○ 香雪菲菲鬪艷姿	水城まゆみ
○ 滿淵夜櫻映水宜	原田睦夫
○ 碧塘花發連白眉	蔦 清昭
○ 花滿池畔可吟詩	三浦哲郎
○ 觀花遊客步遲遲	瀧川智志
○ 紛紛花落被風吹	中村講二
○ 瑤花滿目似西施	中村 泰
○ 花天月地萬千枝	川久保普美子
○ 早曉瑞櫻霞雨絲	東島正樹
○ 廻舟綠水花影移	高橋光代
○ 片片紅葩青史垂	武田利廣
○ 水彩灼灼更增奇	松本祐輔
○ 翠溪漾漾萬景奇	中島龍一
○ 白頭逢春願春遲	牛山知彦

櫻淵夢幻

 微韻


◎ 發櫻花爛漫盡芳菲 水城まゆみ

○ 東皇正此報春機 新井 治仁

○ 錦城早曉花事稀 福田忠夫

○ 皇都烟花每依依 五嶋美代子

○ 花城如幻客聲微 鈴木潔州

○ 千株如鳳盡芳菲 白石信隆

○ 櫻花爛漫淵堤輝 坂上貞夫

○ 青旻朱櫻綠水菲 飯島敏雄

○ 水鏡櫻花萬朶輝 石川俊之

○ 扁舟浮處萬櫻圍 高橋純子

○ 西行來遊萬花飛 田内 隆

○ 靈魂也賞花雲衣 佐藤三祿

○ 櫻花艷艷夕陽微 鈴木正敏

○ 萬朶花堤淡夕暉 木村 孝

○ 宴筵酣醉夢魂飛 香取和之

東京の桜が満開になったタイミングでしたので、吟行地千鳥ヶ淵、吟行テーマ・櫻淵夢幻は、ぴったりはまった感じでした。投句者には実感を込めやすかったのではないでしょう。吟行地紹介のYouTubeの出来がよく、日夜の光の変化の中での桜、空・陸・水面と視点を変えての桜に、千鳥ヶ淵の素晴らしさを再認識した吟行会でした。

(オンライン吟行会 司会 蔦清昭)

神漢連オンライン吟行会に参加して

令和会 鈴木潔州

神奈川県漢詩連盟の末席に加えて頂き四年になります。令和元年五月、神奈川県近代文学館での初心者入門講座に参加させて頂き約二十名の皆さんが熱心に感銘を受けました。爾来、皆様と漢詩を学ぶことの出来る有難さを感じています。小生の守る山寺嶽林寺は群馬県北部に位置するみなかみ町にあり、神奈川県で開催される会には中々参加出来ないでおりました。

そんな中、神漢連事務局、令和会竹村様よりオンライン吟行会のお誘いがあり寺院関係の漢詩会にも入っておりますが、吟行会ははじめての経験で喜んで参加させて頂きました。詩題と関連の動画も提示されており親切です。初めは動画を見ずに詩題のみで作った為、的外れのものになってしまいました。次からは詩題についての動画も拝見、令和会講師の松井先生より詩題についての大切さをご指導頂き自分なりに調べ参加しております。皆様の作られた句から学ぶ事も多く、選者の先生が、提出された句を的確に並べる方法も参考になります。

遠方においても参加出来るZOOM形式のオンライン吟行会や講演会、会議はとて有難く関係の皆様には心より御礼申し上げる次第です。これからも参加させて頂きたく思っております。

十六期初心者入門講座開催 — 新たな仲間が神漢連に入室 —

令和四年度初心者入門講座は五月十日から

六月十七日の間全五回の日程で開催されました。コロナ禍がくすぶり続ける中、応募された十四名の方は一名の脱落者もなく、終始熱心に受講され、神漢連伝統の寺子屋個人指導では、活発な意見交換で七絶実作に取り組みました。本年度の特徴としては、女性が八名、男性六名と初めて男女比が逆転し、年齢的にも八十代半ばから、現役女子大生までバラエティに富んだ構成となり、また台湾出身の方もおられ名詩鑑賞の際は中国語による朗読を披露いただくなど、受講生は漢詩の奥深さを体験できる内容となりました。また、既会員三名に加え、講座中に八名の新加盟の登録を済まされるなど、たいへん意欲的です。



講師の話に聞き入る16期生

十六期のサークルは以下の陣容で発足することになりました。サークル世話人代表 内山早奈江さん、世話人としては大澤豊照さん、佐竹信一さん、講師は高津有二事務局

長、白石信隆執行理事です。

最終日の卒業詩の講評で表彰された作品は次の通りです。
(新井治仁)

最優秀賞

梅雨書懷

梅雨懐いを書す

大澤豊照

陰陰茅舎慰衰翁

陰々たる茅舎 衰翁を慰む

連日寂寥煙雨濛

連日寂寥として 煙雨濛たり

友到論詩茶換酒

友到り詩を論じ茶を酒に換う

虎溪三笑興無窮

虎溪三笑興窮まること無し

優良賞

梅天偶成

梅天偶成

小島数子

且昼梅花花朵低

且昼梅花 花朵低る

故園亦是雨凄凄

故園も亦た是れ雨凄々たらん

無端月照晚呈露

端無くも月照り晩に露れを呈す

蜀鳥思歸何不啼

蜀鳥帰るを思い 何ぞ啼かざる

佳作

夏日海村

夏日海村

内山早奈江

松風清爽水禽鳴

松風清爽として 水禽鳴く

鳥影蒼茫釣艇横

鳥影蒼茫として 釣艇横たう

斜日客歸魚忽躍

斜日客は帰し 魚忽ち躍る

遊人忘刻一身輕

遊人刻を忘れ 一身軽し

山門坐禪

山門に坐禪す

山本孝司

会友吟聲浴佛光

会友吟声 仏光に浴す

山門殘雪坐華堂

山門殘雪 華堂に坐す

莊嚴老樹添風趣

莊嚴たる老樹 風趣を添う

盡日論詩對夕陽

尽日詩を論じ 夕陽に對す

初心者入門講座を受講して

王淑珍

「初心者入門講座」のチラシを見た時、小さい頃、亡くなった父に言われた「唐詩三百首を覚えてください」の言葉を思い出し、「勉強しようかな」と軽い気持ちで申込んだ。

初回、「江南春」鑑賞時に、全員で「読み下し」をしたが全然ついていけず、「読み下し」の意味さえわからなかった。その後、漢詩規則を説明されたが、「平」や「仄（そく）」も聞いたことがない。その日から、漢詩作成で頭がいっぱい。

第二回目以降の詩作宿題には「人」と「日」の同字重複、「詩情五月」の不適切な表現、「杜鹃」は鳥で花ではないなど、衝撃的な指摘を数々受けた。

漢詩は中国の才華文人の世界だ。「詩語表」を見た途端、「恐らく世界で日本人だけが、その精神力でこの様な本を作成したのだろう」と驚いた。言語障壁を越えて不可能を可能にし、漢詩を庶民にまで広げようとしている。組織力と情熱によって漢詩文化の拡大を実現している三村会長を始め講師の方々には深く感謝致します。



少人数毎の指導

会員の活動

漢詩鑑賞会と漢詩サークルの一年間の活動

事務局長 高津有二

神漢連の活動の二本柱といえる漢詩鑑賞会と漢詩サークルの活動は、長引くコロナ禍の中でもいろいろな障害を乗り越えて活動を継続してきました。講師の先生方、お世話頂いた役員の方々に厚く御礼申し上げます。

漢詩鑑賞会は、鑑賞会A・B・C・霧笛女子会の四つがあり、講師の先生の交代、内容の一部変更等がありました。コロナ禍の中でもZOOM方式を中心に継続実施してきました。漢詩を読んで楽しみたいということ、トータルとして参加者が増えていることは、大変喜ばしいことです。ZOOMでは自宅で気軽に参加できることから、ポストコロナでもこの方式で実施してほしいとの声が多く聞かれ、事務局の検討課題になっています。

サークル活動は、十五のサークルがコロナ禍の中でもメール、文書による交流、ZOOMあるいは対面方式と、夫々の実情に応じて工夫を凝らして継続実施されました。サークル活動の問題点は、高齢化に伴うサークル員の減少傾向と講師の不足の問題があり、サークルの統廃合は喫緊の課題となっています。

令和3年度サークル活動状況

開始年、区分	サークル名	会員数	代表者	指導者	開催月・曜日	主な会場	特記事項
H19、1期 H30、12期	金星干支会	7	五嶋美代子	三村公二 新井治仁	奇数月・第2火	地球市民かながわプラザ	・2021年11月に、金星干支会として合流した。
H20、2期及び H25、7期	三水・七歩会	8	中島龍一	古田光子	奇数月・第3水	八洲学園大学	・添削指導は郵送書類で行っていたが、3月より対面で実施。
H21、3期	好文会	7	高津有二	玉井幸久	偶数月・第3木	地球市民かながわプラザ	・設立以来12年間ご指導頂いた城田六郎先生が、R3年7月に逝去された。10月から玉井先生にご指導頂く。ZOOM主体。
H22、4期	詩游会	10	新井治仁	住田笛雄	偶数月・第3火	神奈川県立公文書館	・全てメール・郵送による投稿と先生の批正で行ってきたが、の10月、12月はが、対面例会を実開。
H23、5期	五友会	7	飯島敏雄	住田笛雄	偶数月・第2木	—	・コロナ禍のためZOOM開催。
H24、6期	以文会	10	香取和之	桜庭慎吾	奇数月・第3木	かながわ労働プラザ	・コロナ禍のため、R3年度はすべて紙上批正。
H24、岳精会	岳精会漢詩研究会	8	家吉幸二	三村公二	偶数月・第2水	岳精流日本吟院総本部(川崎市)	・ご指導頂いた城田六郎先生がR3年7月に逝去された。
H26、8期	八起会	12	橋本孝一	中島龍一	奇数月・第3木	横浜市開港記念会館	・コロナ禍により、例会実施は数回にとどまった。
H27、9期	九詩期会	13	山口幸雄	古田光子	奇数月・第2木	八洲学園大学	・5月、9月、3月例会をZOOMズーム開催。 ・川上先生辞任。
H28、 千代田岳精会	千代田岳精会漢詩研究部	10	田川行雄	桜庭慎吾 香取和之	偶数月・第1木	新宿文化センター	・コロナ禍により、2回は対面で4回は紙上で批正を実施。
H28、10期	十期会	10	細江利昭	高津有二	奇数月・第3木	横浜市戸塚公会堂	・コロナ禍により、オンラインやメールと封書方式で実施。
H29、11期	詩林会	5	白石信隆	中島龍一 飯島敏雄	偶数月・第2水	かながわ労働プラザ	・定例会は対面2回、ZOOM3回。
R1、13期	令和会	9	竹村文孝	松井秀人	奇数月・第1火	県民センター	・例会は対面1回・ZOOM3回・添削送信2回。
R2、14期	志詩会	8	東島正樹	香取和之 牛山知彦	偶数月・第3月	なか区民活動センター	・令和3年4月に第1回例会を開催、以降計6回開催した。
R3・15期	逸語会	11	川喜田康	水城まゆみ 高田宗治	奇数月・第1火	かながわ労働プラザ	11月より開始。11月、1月、3月開催済み。
計	15サークル	135			奇数月7、偶数月8		

漢詩鑑賞会一覧

注) 鑑賞会A・Bは現在ZOOMで開催、Cは会場+ZOOMで開催。

名称	講師	曜日・時間	会場	問合せ先	概要
鑑賞会A	桜庭慎吾	第4木 13:30-15:45	—	瀧川智志 045-516-1234	宋詩鑑賞
鑑賞会B	住田笛雄、水城まゆみ	第4金 13:30-16:00	—	高田宗治 090-1841-6764	聯珠詩格の輪講と作詩
鑑賞会C	中島龍一、新井治仁、香取和之	第4火 13:30-16:00	かながわ労働プラザ	香取和之 0467-48-5446	佩文齋詠物詩選より七言絶句
霧笛女子会	古田光子、水城まゆみ、横溝比呂美、大森列子	偶数月、第1火 13:00-15:00	—	水城まゆみ 0463-87-2657	各講師の講義

注) メールアドレス、瀧川: takigawa.ty@jcom.zaq.ne.jp 高田: takada180801@outlook.jp 香取: katorikazuyuki@gmail.com 水城: mmizuki@kfz.biglobe.ne.jp

「漢詩鑑賞会B」新たに再スタート

鑑賞会B世話人代表 高田宗治

漢詩鑑賞会Bは、「聯珠詩格第二冊」(大野修作校閲)をテキストとし、輪講形式による各詩の鑑賞を行うとともに「格」を用いた作詩の二本立てで一月から開始している。

現在はオンラインによるZOOM開催となっているが、今後対面方式も検討する。勉強会の流れは次の通り。

一・輪講形式による漢詩鑑賞の勉強では、テキストの記載不足分(語釈、通釈、詩人略伝等)の補足や、調査段階で新たに発見した内容なども含めて、これらを基にした輪講資料を作成し、各自発表するという方法を採用している。回を重ねることで更なる充実した研究内容を目指している。

二・作詩の勉強方法については、従来と大きな変わりはないが、ただ異なる点と云えば、前回学んだ「格」の中から「莫」や「夜来」「近来」等を用いた作詩に挑戦しており、作詩力の向上を図っている。

三・当然のことながら、一項と二項とも講師陣(住田、水城両先生)の的確な補足と加筆により、完成度の高い内容を目指している。

四・毎回の結果資料については、メール送信及び必要に応じて郵送対応を行っている。

今後は会員の皆さんの要望に答えるべく、また、楽しく学べるためにも講師スタッフ一同更なる工夫をしていきたいと考えている。

金星干支会の発足にあたって

金星干支会 五嶋美代子

金星会の飯沼一之講師がご高齢の為引退されたのがきっかけとなって、漢詩サークル一期の金星会と二期の干支会の合流の話が持ち上がったのは、約一年半前の令和二年十一月に遡ります。金星会の代表は、三上光敏氏が他界の後上田尤子氏が引き継いでいたが、二つのサークルの顔合わせを計画していたところでコロナウイルス感染拡大が始まってしまいました。それでZOOMで合同サークル会という形の暫定的な交流を行い、一年後の令和三年十一月に、正式に金星干支会が発足しました。直後に中心となって合流に力を尽くされていた当初代表の安田茂氏が退会するというハプニングがあり、結局令和四年の五月になってようやく全てのメンバーの顔合わせが整いました。

ここまでの道のりは正直長いものでした。しかし、三村公二講師・新井治仁講師の下、思いがけず他方からのメンバーも加わり、新しい一歩を踏み出した金星干支会の雰囲気は明るく開放的です。これからのサークル活動がとても楽しみです。



金星干支会のメンバー

霧笛女子会

水城まゆみ

偶数月の第一火曜日に開催されます霧笛女子会は、平成二十七年二月頃始まり今年で八年目に入りました。古田光子先生より詩経の「桃夭」から始まり、白居易の「議婚」まで、主に女性の人生を詠じた詩を講義して頂きました。「王昭君」「班婕妤」「蕉仲卿妻」「長恨歌」等、数奇な運命をたどった女性の生涯を歌った漢詩は、日ごろ七言絶句ばかりに親しんで、あまり読んだことのない古詩を紹介していただき、毎回興味深く鑑賞させて頂きました。

令和二年頃よりコロナが蔓延し、昨年と一昨年は年に一回しか、開催できなく大変残念な事でした。先生にはこれからは、地域の皆様に講義されている、枕草子など日本の古典と漢詩についてお話を毎回やっていただくことになり、嬉しく思っています。先生の講義の後、水城と横溝比呂美さん、大森冽子さんが、それぞれ漢詩の鑑賞を担当することになりました。水城は聯珠詩格の解説を行う予定です。新たに入会された女性の皆様の参加を期待しています。



会員のたより

私の好きな漢詩

—漢詩へのさまざまな思い—

「私の好きな漢詩アンケート」は、神漢連創立十五周年記念行事の一環として昨年行い、四十六名の方々から回答がありました。皆、自分の好きな漢詩には並々ならぬ思いがあり、会報三十号で五名の方に好きな理由、その詩との関わりや思い出などを述べて頂いたところ大変好評でした。

つきましては、今号以降も、順次アンケート回答者にその思いを語って頂くことに致します。今回も各々の「好きな漢詩」の理由は、自分の忘れ得ぬ思い出、貴重な人生訓、歴史上の人物への憧憬、そして思いの尽きぬ詩情などと、皆それぞれ異なっており、決まり切った詩の解説書より一層詩への興味が湧いて来る、と感じるのは私だけではないと思います。ところで、「好きな漢詩」が多種多様であり、また「好きな理由」も人によって大きく異なりますが、この多様性こそが神漢連の良さであり、また活力に繋がっていると思われ

ます。
(香取和之)

「陽関三疊」の思い

好文会 高津有二

送元二使安西

王維

渭城朝雨浥輕塵 渭城の朝雨 輕塵を浥おす
客舍青青柳色新 客舍 青々 柳色新たなり
勸君更盡一杯酒 君に勸む更に尽くせ一杯の酒
西出陽關無故人 西のかた陽関を出づれば故人無からん

二〇一八年九月、神漢連の西安・敦煌漢詩ツアーを企画し、敦煌を訪ねた。夕暮れ迫る陽関遺跡の前に立ち、「陽関三疊」を心の底から吟じた。人生には思い出に残る事が幾つかあるが、間違いなく思い出の一コマであり、今でも時々、その時のことが思い出される。

この漢詩は、日本版の「星影のワルツ」であるが、会社時代の送別会で気軽に歌った歌とは違って、当時の人たちは、二度と会えないだろうと、切実な思いで友人を送る時に、この詩を唱っていたことだろう。

定年後に詩吟を習い始めた。詩吟の発表会では、必ず一曲吟詠することになっているが、なぜか、この詩を吟じたことがない。そのかわり、その他の余興の席で、詩吟を一曲と求められると、いつもこれを吟じた。

定年後に友人が、海外協力基金の仕事で、南米に赴任する送別の席で吟じた時には感動のあまり、友人に涙ぐまれたことを記憶している。本来、聴く人の心に快く響くために考えられた平仄や韻律の規則に作詩上、いつも悩まされているのは、奇妙な感覚である。

「述懐」への思い

以文会 香取和之

「述懐」末尾の一節(二十句の五言古詩)

魏徵

豈不憚艱險 豈に艱險を憚らざらんや
深懷國士恩 深く國士の恩を懷つ
季布無二諾 季布二諾無く
侯嬴重一言 侯嬴一言を重んず

人生感意氣 人生 意氣に感ず
功名誰復論 功名 誰か復た論ぜん
注)魏徵は唐の太宗に仕えた名臣であり、「貞觀政要」にしばしば登場する。太宗によく直言し諫めたことでも知られる。季布は漢代の人で、信義を重んじた。侯嬴は戦国時代の魏の人で、信陵君に厚遇され、約束の一言を重んじ、自ら首をはねて死んだ。

「述懐」を始めて知ったのは、今から三十年前の四十歳代であり、安岡正篤氏の著書による。その前から、同氏の著書をかたっぱしから読むようになり、いわゆる「人間学」に関心があつたが、「人生感意氣、功名誰復論」に、これこそ人生の指針であり、神髓だと思つた。同氏の影響で、当時から「論語」を読み座右の書としていたが、漢詩に「論語の副読本」的なものを求めていたのかもしれない。

漢詩を読むようになってかなりの年月が経つが、未だに「述懐」以上に感服する詩は見あたらぬ。一方で、人生の晩年を迎えつつある中、最後まで「人生感意氣」で過ごせるのか、また論語の「發憤忘食、樂以忘憂」を貫けるのか、人生は続く。

「金州城下作」に、乃木希典將軍を思う

三水七歩会 鈴木正敏

金州城下作 乃木石樵 一八四九—一九二二
山川草木轉荒涼 山川草木 転た荒涼
十里風腥新戰場 十里風腥 新戰場
征馬不前人不語 征馬前まず 人語らず
金州城外立斜陽 金州城外斜陽に立つ

今から百十八年前。一九〇四年は日露戦争。

第三軍の司令官・乃木大将は、難航不落と謳われた中国東北地区南部の旅順港背の要塞を攻略した英雄となり、その人となりから聖将とも呼ばれた。この名作は明治三十七年六月七日、戦没者の霊を弔った日記にあったもの。山も川も震えるぐらいの大激戦。乃木將軍の部下の戦死者二万余。ここで長男次男も失う。転句結句に感動する。馬は進まず人も話さず。金州城の外で、満州の赤い夕陽に照らされた軍神乃木の姿が浮かんでくる、辺塞詩の傑作。これを石川忠久先生は、天の与えた作品と。日本漢詩の最高峰の一つだとの評価もある。

三〇数年前の現役の頃、英・スウェーデンフィンランド・トルコ等の高齢の人たちからアドミラル東郷とか、乃木將軍のことを度々聞かれて驚いたものである。その後、司馬遼太郎の「坂の上の雲」一九六八年・産経新聞連載・文庫でも再三熟読、興味は尽きない。
ウクライナ国民に、一日も早い平和を！

結句「便」すなわち 心を掴まれた

岳精会 前嶋彩江

秋思 劉禹錫
自古逢秋悲寂寥 古より秋に逢うて寂寥を悲しむ
我言秋日勝春朝 我は言う秋日春朝に勝ると
晴空一鶴排雲上 晴空一鶴雲を排して上る
便引詩情到碧霄 便ち詩情を引いて碧霄に到る

私の小庭は春の花が咲き誇り、二羽のメジロも飛んできた。そんな春の光景に勝るものなどあるはずがない。

けれど私は、劉禹錫の「秋思」に惹かれてしまったのである。
それは承句の「我は言う」にはじまる。幼少よりワガママな私は、常に「我言」を実践してきた。失敗もあったが、素直な気持ちの「我言」は受け入れられた。そして漢詩では「我言」を拝借させて頂くことで、大変上手くいくのである。
この絶句の一番の見せ場は、転・結句であろう。抜きん出た一羽の鶴が、雲を排して碧空に上るのだ。今世界で起きている様々な災いを払ってくれる救世主のようではないか。思えば若い頃この詩を得意げに吟じた。是非、大きな声で読んで頂きたい。気持ち爽やかになる事請け合いです。

劉禹錫自身、人生を詠んだ数ある詩の中で「秋思」こそが、詩情を引いて、希望に満ちた傑作であったに違いない。

弘法大師との「縁」

令和会 竹村文孝

後夜聞佛法僧鳥 後夜弘法僧鳥を聴く 空海
閑林獨坐草堂曉 閑林独坐す草堂の暁
三寶之聲聞一鳥 三宝の声一鳥に聞く
一鳥有聲人有心 一鳥声有り人心有り
聲心雲水俱了了 声心雲水俱に了了

コロナ禍のため数年ぶり根室中標津の山寺に帰郷。知床・摩周連峰を望み、裏の山川では弘法僧ならぬカッコウが鳴き正にこの空海の漢詩の世界に久方ぶりで浸ったような気がしました。

大師・漢詩・漢文との出会いは、寺院に生まれ本堂には大師の仏像仏画あり、幼少時から朝食前父に経を教わり、般若心経・弘法大師和讃・理趣経等の経文を素読し、意味も解らず自然に仏教世界へ。大学・社会人となり四十年程寺から離れ、退職後父の勧めで修行・空海生誕の地四国善通寺にて伝法灌頂(儀式)を受け、京都御寺泉涌寺から僧侶の命を授かる。母も詩吟を吟じており空海の漢詩は自然に身に残っている。

空海は膨大な密教経典を唐から持ち帰り布教活動を行い、日本文化の発展に寄与した宗教家・思想家です。お寺に生まれた「縁」で空海の漢詩思想に出会い、人生を過ごしてきたことは私にとって人生の最大の宝となっております。

会員の声

—多彩な会員の漢詩との出会い—

なぜそこに

以文会 大森冽子

漢詩に興味を覚えたきっかけは十代の頃に読んで血沸き肉躍らせた三国志のせいではないだろうか。あの頃はラジオ、テレビで石川忠久先生の講座を時折視聴したりしていました。

しかし、他の趣味事に忙しく長い間漢詩からは遠ざかっていました。ある時職場の仲間が主催の漢詩鑑賞の会に入ることになり漢詩との再会を果たすことになったのでした。もっぱら講師の先生の漢詩にまつわる余談が魅力で参加していたのですが、残念なことに会も終わりをむかえようとした時、運命の出会いでしょうか平成二十四年の朝日新聞の神漢連の募集をみて、渡りに船で何とか漢詩と縁を切らずに済むことが出来たのでした。

その後はサークルの仲間の薦めや先輩の後ろ押しなどを得て外部の作詩講座に参加したり、漢詩コンテストに応募したりと多分に漏れず漢詩にはまっていったのでした。度重なる落選にもかかわらず今に至って残った唯一の趣味が漢詩となりました。万年中級の作詩はさて置いて、今、ここ漢詩の深淵を覗く楽しさを知ってしまったのでした。

今日も家事時々漢詩。さてそろそろ愛犬の散歩に出かけるとしますか。

「漢詩自由訳コンクール」の最優秀賞を受賞して

嶋内隆行

「漢詩自由訳コンクール」での最優秀賞ありがとうございました。会報を読み城田六郎先生の文部科学大臣賞受賞の詩を訳そうと決めました。応募する以上は入賞して、先生に感想をお聞き出来るような作品にしなければと取り組みました。

酒匂川の畔の瀬戸酒造で新酒を召し上がり、この作品を作られたと書かれています。グーグルマップで現地を見ると田んぼの真ん中に工場があり、遠くには富士山が見えます。のどかな場所で旨酒を酌み交わせておられる先生とサークルの方々の様子を思い浮かべて訳を考えました。まず字句通りに訳し、そこに言い換えられそうな言葉をいくつも書き並べてみました。「祇園精舎の鐘の声」のように読みやすく、耳に残る七文字+五文字で訳が出来ないかと言葉を吟味しました。結果は七(または八)文字と五文字との組み合わせでしたが読みやすく訳せたと思います。

井伏鱒二の「厄除詩集」のような大胆な訳にはとてもなりませんでしたが、漢詩を作る時と違って漢字をひらがなに換えるということに楽しく取り組みました。しかし残念なこと先生のご感想をお聞きすることは、かなわぬこととなってしまいました。城田六郎先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

十五期逸語会始動

逸語会 町田裕子

私達はコロナ禍の昨年、入門講座を経て三月に三回目の例会を迎えた新サークルです。とはいえ、メンバーは中国語や詩吟に造詣の深い方から、漢詩は古文の授業以来という私まで随分と幅があります。ただ、会の命名の時安らかに楽しむという意味を持つ「逸」の字を当てた逸語会という拙案を採って頂き、うれしかったです。

例会には水城まゆみ、高田宗治両先生にご指導を仰ぎますが、そのかなり前にメールで赤と青で添削して頂いた我が詩稿を受け取っているのが緊張して会場に向かいます。

コロナ禍でも顔を合わせての貴重な会では両先生のお人柄もあり和やかに、又深い人生経験に裏打ちされた皆様の詩に込めた思いに触れるのも貴重で密度の濃い時間です。

水城先生がおっしゃる様に唐代の人がわかるような詩を心がけるといふ点から時には昔の中国に遊び、前回の三月の集いでは石川丈山や菅茶山の江戸時代の先人の足跡を辿りつつ詩を味わう事が出来ました。平仄の間違いに青ざめつつ、先生方のご指摘で我が詩が予想外の展開、成長をすることもあります。

今回改めて「逸」の字を引いたら、無駄な言葉のネガティブな意味もあると発見。我詩がムダにならぬよう自戒しつつこれからも皆様と少しずつ歩めたらと思います。

漢詩との出会い

令和会 中村講一

十五年前に中国華北の天津に単身赴任、現地の人との片言の普通語で交流ができた事より、天津での生活にリズムが生まれた。また近年、横浜中華街周辺に住む中国籍の人々と接する機会ができた事より、彼等の生活・文化に興味を湧いてきた。丁度その時期に、神漢連の初心者入門講座のお誘いをいただき、パズルの如く「だれ漢」から語句を選び、規則に従って漢字を繋げることで、学生時代に国語が一番苦手であった小生にでも、何とか漢詩らしきものが出来ることが分かった。

無事に初心者講習会が終了し、同期の令和会の定例会に出席し三年が経過したが、当初考えていた様にパズルを解くような組み合わせだけの漢詩では、なかなか思っていた様な評価が得られない。「詩題が読まれていない」「起承転結がおかしい」「詩語が適切でない」等の難題続出で、指導頂いている先生より教えて頂いた教材「漢詩講座」を購入したものの、内容が豊富すぎて理解できない部分が多く、「これで本当に上達するのであるのか？」と悩むことが多い。

しかし、令和会のメンバーは楽しい方達で、私自身の目的は「中国の生活・文化をより知ること」であることも思い出し、余り深く考えず楽しみながら漢詩と付き合っていこうと考えている。

謡曲と漢詩

志詩会 佐藤三緑

先日、国立能楽堂で能「鞍馬天狗」を観ていておや?と思いました。鞍馬寺の稚児たちの花見の場で前シテ(山伏)が遙かに人家を見て花有れば便ち入る。論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ。・・・と謡っています。白居易の詩から「遥見人家花便入、不問貴賤与親疎」の二句をそのまま引用しているのです。

六十年來の能楽仲間達に聞いて見ても、漢詩と認識している者は居らず、訳も分からずに暗記して六十年間謡っていたのです。調べて見ると現行の謡曲百数十曲で三百五十回も漢詩が引用されているそうです(『能楽大全 第三巻』の「謡曲引詩考 佐成謙太郎」創元社による)。謡曲の文章(詞章という)は最上級の韻文とされ音律がその命です。そこで漢詩や和歌と相性が良く、知らぬ間に溶け込んでいます。必ずしも漢詩の意趣と関連させているとは限りません。能「楊貴妃」、「昭君」、「狸々」などなど元々中国の物語や詩歌などを劇化した曲が多数あり、加えてこの様な漢詩との融合を知ってお能を鑑賞すると興味が一段と深くなります。

能楽の仲間達にはこれを機会に漢詩鑑賞を勧めてやろうと思います。また漢詩を楽しんでいる皆さん、一度能楽堂にもいらっしやいませんか。

「遊嶽林寺螢月亭」が日本一に

令和会 鈴木潔州

ビッグニュースが飛び込んで来ました。小生が守る山寺の前にある螢月亭を題材にした漢詩「遊嶽林寺螢月亭」が日本一になりました。作者は前橋市漢詩研究会の講師を勤める小井戸政世先生です。多くの会員を擁する全日本漢詩連盟の全国大会(石川)で、最高賞である文部科学大臣賞を受けられたのです。

小生は神奈川漢詩連盟、前橋市漢詩研究会に入れて頂き漢詩の勉強を続けております。そうした中、先生より嶽林寺螢月亭について作った漢詩が、最高賞を受賞したとお話を伺いました。実は、先生から「今度、全日本漢詩連盟の全国大会に応募します。今回は特に漢詩の出来が良く手応えを感じています。昨年、嶽林寺で行った吟行会の折に螢月亭に行って参りました。素晴らしい所で、ここで月や螢を愛でることが出来ればと思いつきながら作りました」とお話を聞いておりましたので、先生の前言通りの最高賞受賞には驚きました。先生の「遊嶽林寺螢月亭」が日本一となりました事は当山に取りましても特筆すべき事で本当に嬉しい事でありました。

遊嶽林寺螢月亭 小井戸松風作
寶樹風搖棲鳥夢
玉泉螢舞亂蛙聲
紺園迎月天如水
山氣滿亭清更清

漢詩と私

三村公二

会社を卒業し、漢詩の勉強を始めてからやがて十五年になる。漢詩を始めるようになっていきさつについては先にHPに書いたので省略するが、この間、月に一詩か二詩しか作ってこなかったため、これまでで合計二百詩位で、その内、人様にお見せできるのはせいぜい百詩位であろうか。とても詩集など作る気になれない。しかし、今の私の生活から漢詩を取ってしまったら、ほとんど何も残らないという程に漢詩漬けの毎日である。給料ももらっていないのによくやるね、と言われるけれども、好きなのだからしようがないし、お陰でボケないでいられると思って満足している。

漢詩を始めて一年にもならない時に全日本漢詩大会で幸運にも入選した時、茨城の水戸の表彰式で文部科学大臣賞を受賞されたのは米寿の方であった。その時、「よし、俺も米寿の時に文部大臣賞を取るぞ」と決意を新たにしたので今でも鮮明に覚えている。しかし、その後、漢詩が上手くなる前に連盟の役職についてしまった為、全日本漢詩大会に応募できなくなってしまった。夢は果たせないかと

あきらめていたが、国民文化祭漢詩大会であれば応募できる規約に変わったので、秘かに初心の時の決意を思い出ししている。

初期の頃の私の漢詩作りは、もっぱら詩語集に頼っていたが、窪寺教室で先生が添削された詩句で気に入った句を集めて「貫道先生用語集」を作り、活用していたのが唯一の特徴であろうか。その一端を紹介する。

- 窪寺貫道先生用語集(一)(虚字を中心に)
- ・ 時覚開煨香忽上
 - ・ 頃刻傾觴忽就詩
 - ・ 占尽風情獨解憐
 - ・ 春光忽照鮮苔穿
 - ・ 空依歸路同雲急
 - ・ 相映麗妍殘照中
 - ・ 知得乾坤淑氣通
 - ・ 此是早春天賜豐
 - ・ 忽知天霽韶光暖
 - ・ 却見玲瓏開六花
 - ・ 一去玄陰來復後
 - ・ 宛似嫣然宮女笑

最近では、「韻偶大成」「圓機活法」の活用、さらには、まだ十分に使いこなせていないが「搜韻」を使う事が増え、同時に、唐宋の先人の詩から詩句を借りる方法に変わってきている。李白は華麗すぎてとてもまねできないし、石川先生が見習いなさいと言われる杜甫は整然としすぎていたので敬遠している。私は、白樂天、杜牧、蘇軾、陸游といった中唐・宋時代の詩人の詩が好きで、もっぱら参考にしている。

所で、目下の私の一番の悩みは、皆さんにも共通するが、現在の事象、例えばコロナの

詩を作ろうと思った時の詩語の問題である。ワクチンは中国語の「疫苗」にカタカナのルビを付けて使っているが、正式には全漢連で認められていない。このように、今、日本の漢詩界が抱えている明確になっていない課題がいくつもある。例えば、

- 一、旧字：現在の中国では簡体字での詩作が普通。日本は今後も旧字か？
- 二、和語：「津波」は国際語なのに「海嘯」。詩語の数・巾を増やせないのか？
- 三、外来語：医・科学用語、国名、地名等の現代中国語からの転用は可か否か？
- 四、その他：中国自身が混乱しているようだが、中国との交流は必要なのか？
- 五、若い人達が漢詩に親しめる機会をどのように作っていくか。教育現場に門外漢が容易に入り込めないという大きな壁をどうして乗り越えるかという別の課題があるが。

このような議論を始めると、日本人が作る日本の詩だから、漢文法に則っていないくてもよいとか、平仄は無視してもよいとか言い出す人がかならずいるが、それは間違っている。平水韻に従ってその基本をキチンと守っていく事は必要且つ不可欠であり、李杜にも理解してもらえない漢詩を作るのが日本漢詩の目標だという事を変えてはならない。

「令和三年度
扶桑風韻漢詩大会」
神漢連会員活躍

秀作

聖堂春雪

聖堂の春雪

高橋純子

料峭風寒聖廟晨

料峭として風寒き聖廟の晨

霏霏六出淨無塵

霏々たる六出淨くして塵無し

幽香冷蕊來何處

幽香冷蕊何れの処より來る

入徳門前已有春

入徳門前已に春有り

廬山懷古

廬山懷古

水城まゆみ

香爐峰下訪茅堂

香爐峰下 茅堂を訪う

翠竹青松花吐芳

翠竹 青松 花 芳を吐く

司馬題詩千歲後

司馬 詩を題して 千歳の後

匡廬白雪尚難忘

匡廬の白雪 尚お忘れ難し

佳作

過駱駝城遺跡

駱駝城 遺跡に過る

千里關山夕照開

千里の關山 夕照 開き

空餘故壘略傾頽

空しく余す 故壘の略は傾頽せるを

豈知昔日繁華地

豈に知らんや 昔日繁華の地たりしを

今者遊禽獨往來

今者 遊禽 獨り往來す

杉森千枝美

入選作品

關原戰跡

關原戰跡

岩村順一

群雄激戰亂軍聲

群雄 激戰 亂軍の聲

流血僵尸草木腥

流血 僵尸 草木腥し

看盡風光山不語

風光看盡くせども 山語らず

夕陽西下見飛螢

夕陽西に下りて 飛螢を見る

塞上曲

塞上曲

大谷明史

沙場關塞幾千兵

沙場 關塞 幾千の兵

獵獵旌旗鼓角聲

獵々たる旌旗 鼓角の聲

今日荒臺崩壁寂

今日 荒臺 崩壁 寂たり

朔風吹草日將傾

朔風 草を吹きて 日將に傾かんとす

秦淮

秦淮

小嶋明紀子

獨來古渡舊蹊空

獨り古渡に來たれば 旧蹊 空し

六代興亡一瞬中

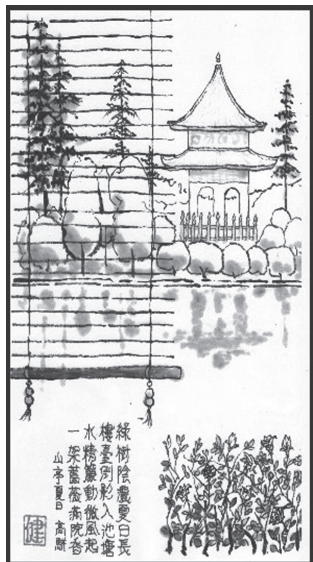
六代の興亡 一瞬の中

今眺秦淮沙上月

今眺む 秦淮 沙上の月

寒風十里聽征鴻

寒風十里 征鴻を聴く



令和四年の全国漢詩大会の予定

奮って応募しよう!

漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページから入手できます。

●令和四年度全日本漢詩連盟設立二十周年記念大会

令和五年三月十八日 表彰式

二松學舎大学

詩題「都・京、および自由題」

応募期間 八月一日〜十月三十一日

●第二十五回全国ふるさと漢詩コンテスト

十一月二十六日 表彰式 多久市

詩題「雨」

応募締切 八月十九日

●第七回漱石記念漢詩大会

大会は開催されずHP上で入賞者公表

自由題

応募完了

●第十四回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月十二日・十三日 三条市

自由題 応募締切 七月三十一日

神奈川県漢詩連盟 令和四年の行事予定

カレンダーに予定を記入しましょう

●漢詩講演会

期日 十一月二日(水)

時間 午後二時～四時

場所 神奈川近代文学館ホール

講演者と演題 横浜国立大学准教授 高芝麻子先生、演題は未定。

参加申込 不要。会員以外も参加可能。無料。

●吟行会

オンライン吟行会を八月三十一日(水)に開催予定。開催日が近づいた頃に、メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

訃報

■神奈川県漢詩連盟の会員 鈴木孝三郎氏は令和四年一月二十一日に逝去されました。(享年八十三歳)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

■神奈川県漢詩連盟の会員 木戸彪氏は令和四年一月二十六日に逝去されました。(享年七十八歳)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

■神奈川県漢詩連盟の会員 久川愛子氏は令和四年三月四日に逝去されました。(享年七十二歳)

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

本号より編集メンバーの香取和之に、新たに東島正樹、高橋純子加わることになりました。宜しくお願い申し上げます。

会報三十号から掲載しています「わたしの好きな漢詩ー漢詩へのさまざまな思いー」では、各々の方が選ばれた詩へのあふれる思いが綴られています。アンケートに投票されなかった方も、「私の一番好きな漢詩は何だろう」「何故その詩が好きなのか」など、改めて考え、思い出を辿ってごらんになるのも楽しい時間かと思えます。

五月二十日に神奈川近代文学館ホールで行われた市川桃子先生の講演会「美についてー漢詩における表現ー」は、沢山の方々が来場下さいました。時代をさかのぼり、現代とは全く異なる「美」の概念や、捉え方の変遷など新しい視点の発見がありました。会場に超越しになれなかった方は、本号の四・五頁、または、YouTubeを是非「ご覧ください」。

この原稿を書いています五月は、蔓延防止等重点措置も解除され、街の人数が増えたように思います。今年の夏はマスクをせずに外出できるようになるでしょうか。そろそろコロナウィルスの不安からも解放されて、趣のある詩が自然と浮かんでくる、そんな日々が戻ってきてほしいものです。

(高橋純子)